

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 福井大学連合教職大学院
コラボ研修プログラム	事業名：福井大学連合教職大学院東京サテライト DEAL 教員研修
支援事業報告書	研修等名：【NITS・福井大学連合教職大学院コラボ研修】 「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う教員研修」part II -「主体的・対話的で深い学び」を支える新しい教師の実践的力量的な在り方を探る-
	開催日時：令和 5 年 9 月 2 3 日（土）・9 月 2 4 日（日） 9：00～16：30 開催場所：沖縄県宮古島市内（沖縄県宮古市役所（沖縄県宮古島市平良西里 1140 番地）（ほか） 参加人数（総数）と参加者の属性：（57 人）沖縄県宮古島市教育委員会 3 名、沖縄県宮古教育研究所 1 名、沖縄県教育庁宮古教育事務所 1 名、東京都渋谷区教育委員会 1 名、一般教員 23 名、幼小中高校管理職 12 名、民間企業等 6 名、教職大学院教員 5 名、教職大学院生 4 名、他大学教員 1 名

#### 内容：

沖縄県離島宮古島において福井大学連合教職大学院（東京サテライト）が第 2 回ディープ・アクティブラーニング（DEAL）教員研修を開催した。

#### Session I（協働探究演習）9/23

病弱・健康課題のある東京の特別支援学校の小学生が総合的な学習の時間に考えた「宮古島を巡る探究コース」を参加者が 3～4 人のグループをつくり、探究のフィールドワーク(FW)を実施した。FW後にまとめの会を行い、各コースの報告に対し、講師のさくら認定こども園園長 伊藤康弘氏が、子どもの探究思考に伴奏することの意味についてコメントをおこなった。

#### Session II（理論と実践の融合、協働での省察）9/24

午前の第 1 部では、葛飾区立保田しおさい学校教諭 井筒大地氏より総合的な学習の時間の実践報告がおこなわれ、続いて講師の森田さくらこども園の園長 伊藤仁美氏より幼児教育の視点から子どもの「ねがい」を大切に、子どもの考えを感じ待つことの重要性について話された。その後、福井大学の特命教授 福島昌子氏、講師 宮本雄太氏の対談がおこなわれ、協働探究の「問う」「問い直す」「問い返す」ことの意味について参加者とともに共有した。第 2 部では地域を超えた教師の協働探究ラウンドテーブルを実施した。前半は埼玉県立川越初雁高等学校教頭 加藤悟氏、東京都立墨東病院看護師 西野明子氏、他 10 名がファシリテーターをおこない、Session I の FW の紹介と省察をおこなった。後半は加藤氏、西野氏も含め各グループで各参加者による職場の実践報告をおこない、探究活動や学習課題へのリフレクションとした。午後は、大神島にて教育の意味を問い直し、自己の省察と共に教育課題と向き合う研修をおこなった。

#### 成果：（参加者の声）

- ・今までにない研修のスタイルで新鮮だった。普段、たくさんの人数を保育する中で、ひとりの子とじっくり向き合うことは正直なかなかできていなかったのが、今回改めて一人ひとりと向き合うことの大切さを実感した。探求って、こんなに面白いんだと、子ども心に戻りました。
- ・グループでその子の思いを語り合い、理解しようと思いを巡らせ、一つの事に協働で探求していくなかで、多様な視点があることを再確認することができた。地域を超えた先生方で教育を語る研修はとても新鮮でした。
- ・コースを回る中で、子どもに寄り添うことには限界があることを痛感しました。ですが、それでも考え続けることが、探求していくことであり、教師もさらに視野を広げて、子どもたちと一緒に経験していくことが大切であると、改めて考えていました。
- ・宮古島を舞台に、子どもたちの視点で島外のいろいろな地域の先生方と一緒に巡ることで、これまでには気づかなかった新しい発見をすることができた。探究を追体験していくうちに自然と自分自身の探究が始まっていることに気づいた。探究学習を学校でも広げていくための大きなヒントを得ることができた。
- ・宮古島に住んでいる。宮古島は“生活”だ。海やサトウキビ畑は、あって当たり前風景としてある。研修後、宮古島をもっと体験したいという気持ちがあふれている。わくわくする。子ども達に地域の学習をさせるとき、あって当たりの日常の風景をわくわくするものに変えられるような実践をしたいと感じた。

本研修では、感性が揺さぶられるような協働探究演習を地域を超えて教師同士が教育実践の在り方を往還することで、子どもたちの学びと同様に新たな教師の問いと向き合うことができると考えた。

## アイデアや工夫したこと：

- ・離島事情である島内の少数教員で実施される研修を県外の都道府県教員・管理職、大学研究者、教育行政関係者が参加する教員研修にしたこと。
- ・沖縄県離島（宮古島）が実施してきた一方向的な一斉型または離島が故に動画視聴が中心の教員研修（教師の伝達型の講習モデルで実施してきた教員研修）を、教師の協働探究実践過程でその省察を共有し学び合う研修システムに転換して開催したこと。
- ・健康課題があり行動制限のある東京の特別支援学校の小学生がさまざまな対象者（家族、友達、学校の仲間など）に向けて宮古島を巡る探究コースを考えた。通常、教師は子どもの考える探究思考の中を辿る経験をする事ができない。それを本研修では参加者が小グループに分かれ、子どもが考案したコースを協働で巡り探究活動の演習を実際におこない、教師自ら「問い」を立て、「問いに問い返す」演習を経験したこと。その研修の後に自身の日ごろの実践を語り共有しながら協働探究のラウンドテーブルを実施したこと。
- ・教師の「主体的、対話的で深い学び」の協働探究演習を体現化したこと。

